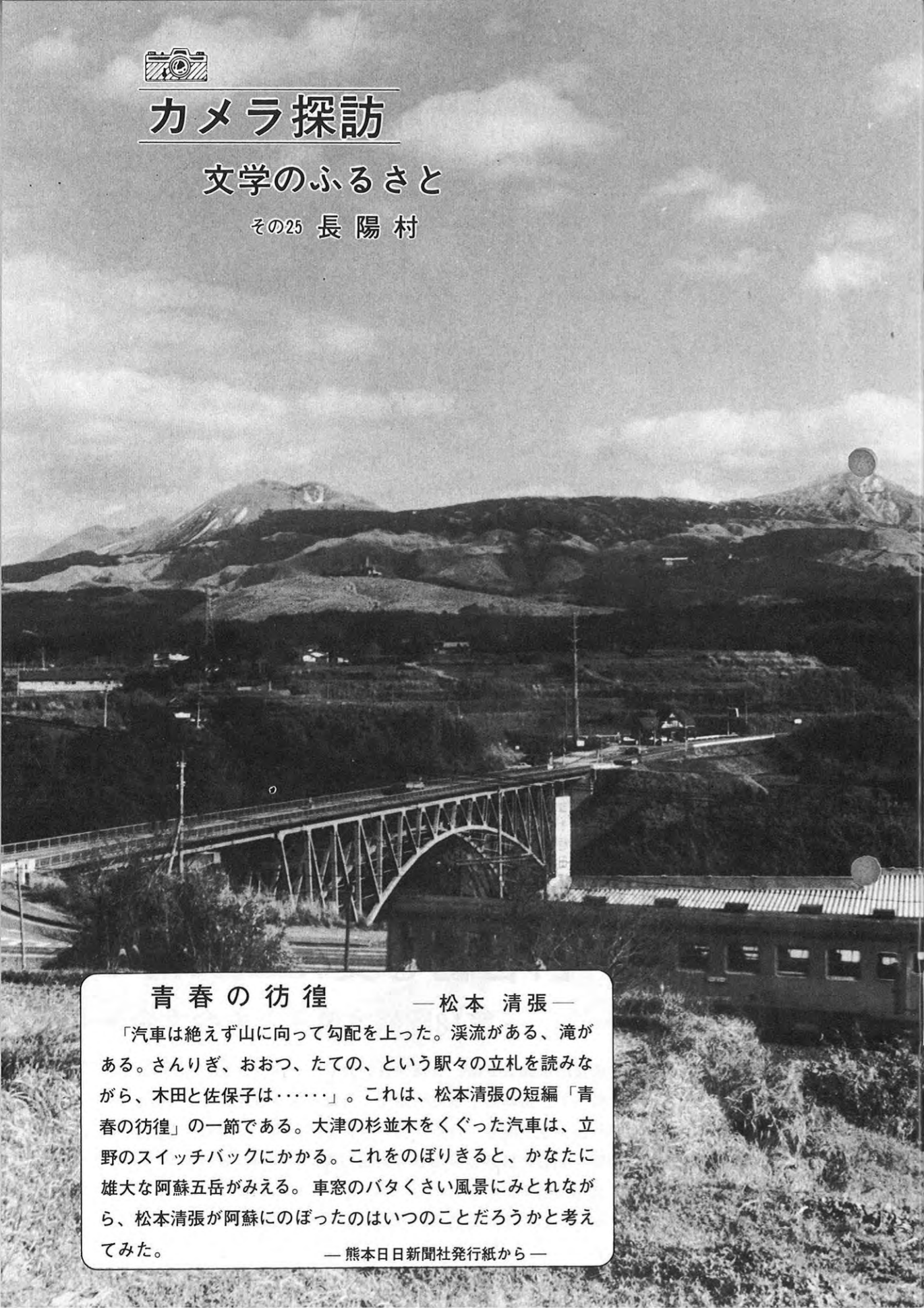




カメラ探訪

文学のふるさと

その25 長陽村



わたしの郷土

甲佐町立甲佐小学校 六年 甲斐知昭

甲佐町は、南北に長く、三方を小高い山や丘に囲まれ、一つの町、四つの村が合併して生まれ、二十五歳を迎えました。町の中ほどには、緑川の流れが続き、うの瀬・麻生原・糸田・築地せきと呼ばれる大きなせきがつくられ、かんがい用水に利用されています。

もともと、甲佐の地は、米作りが主で、すし等で有名な甲佐米が生産されてきましたが、今日では農業も近代化され、果物、野菜類の生産が多くなっています。その他、田口・田原地区の樹木の生産、豊内地区の電照菊の栽培等は有名で、各地区に生花用の花作りが盛んです。また、酪農も行われ、ミルクステーションもできています。なお養蚕も盛んで、製糸工場の操業も古くいい糸が生産されています。工場も二〜三誘致され、工業面でも期待されそうです。

伝承行事としては、春の初市・夏の地藏祭・鮎祭・清正公祭等があり、中でも鮎祭りは年々盛大になっています。また、宮座と呼ばれるのも残っています。その他、たこ上げ大会や伝承遊びの行事等もあるようになりました。

名所としては、夏にきあうやな場・緑川製糸跡の記念碑や、町の文化財候補にあがっているのが十数ヶ所もあります。また、名物としてあげられるのは町の本通りに川が流れているところです。そこには、シヨピングパーク甲南と呼ばれる二つの公園ができています。これは、日本で初めてのものだそうです。

忘れてならないことは、麻生原にある国の天然記念物に指定されている金木犀です。秋と春にいい香りをただよわせてくれる町の誇りといえます。また、他町村には、見られない八つの大きな橋があることもあげられます。水や空気がきれいで、豊かな自然に恵まれています。歴史のある町、豊かな自然の町が益々発展してほしいと思います。

青春の彷徨

— 松本 清張 —

「汽車は絶えず山に向って勾配を上った。溪流がある、滝がある。さんりぎ、おおつ、たての、という駅々の立札を読みながら、木田と佐保子は……」。これは、松本清張の短編「青春の彷徨」の一節である。大津の杉並木をくぐった汽車は、立野のスイッチバックにかかる。これをのぼりきると、かなたに雄大な阿蘇五岳がみえる。車窓のバタクさい風景にみとれながら、松本清張が阿蘇にのぼったのはいつのことだろうかと考えてみた。

— 熊本日日新聞社発行紙から —